

日中国際結婚に関する一考察

—— 業者婚する中国女性の結婚動機を中心に ——

郝 洪 芳

1 はじめに

日本では、1980年代後半から結婚総数に占める国際結婚の比率が全体的に上がり、国際結婚が大幅に増加してきた。その中でも特に日本人夫・外国人妻という組み合わせの結婚の増加が顕著であり、すでにその割合は、国際結婚総数の70%強に達している⁽¹⁾。現在日本人夫・外国人妻という組み合わせのなかで、日本人夫・中国人妻という組み合わせが最も多くなっている⁽²⁾。この日本人男性と中国人女性の国際結婚には、恋愛結婚と紹介によるお見合い結婚が含まれると考えられる。近年、日本と中国との間の交流が盛んになり、日本から中国に向かう観光客、駐在員、また中国から日本への観光、留学も増えている。このような状況において、交流する人々が恋愛をして結婚に至ることも当然ありうるだろう。一方、1980年代から日本農村男性は、結婚難、いわゆる「嫁不足」の問題に直面していたので、政府斡旋によるアジアの女性とのお見合い国際結婚も出てきた⁽³⁾。その後、政府にかわって、斡旋業者が国際結婚を仲介するようになった。現在、そのような結婚は、日本の農村部だけではなく、都市部にも及んできている。本稿は自由恋愛ではなく、斡旋業者によるお見合い結婚を論じることとする。

こうした斡旋業者による結婚（本稿では以下「業者婚」と呼ぶ）の成立経緯は、斡旋業者のホームページと後述する筆者の調査結果から、およそ以下の3タイプに分類することができる。

タイプ1＜訪中2回＞：日本人男性が日本の結婚紹介所で、中国人女性の結婚候補者（複数）を写真で選択した後、中国にお見合いに行く。お見合いを通して日本人男性が一人の

⁽¹⁾ 平成18年度厚生労働省人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況、婚姻の推移部分の図2による。

⁽²⁾ 平成18年度厚生労働省人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況、夫妻の国籍別にみた婚姻部分の表14による。

⁽³⁾ 『農村（むら）と国際結婚』（佐藤1989）、『アジアから来た花嫁』（宿谷1988）による。

中国人女性を選び、選ばれた女性も結婚に同意すれば婚約にいたる。日本人男性はいったん日本に帰り、挙式のため再度訪中する。

タイプ2<日本でお見合い・訪中1回>：日本人男性が、日本の結婚紹介所でテレビ電話（インターネット上）を通して中国人女性たちとお見合いをする。お互いのことを気に入り、結婚の意思確認ができれば、その女性と実際に会って結婚するために訪中する。

タイプ3<中国でお見合い・訪中1回>：日本人男性が日本の結婚紹介所で中国人女性の候補者（複数）を写真で決める。その後、中国で彼女たちとお見合いを行い、相手が決まり次第すぐに結婚式を挙げる。

この3タイプとも、挙式後に日本人男性が日本に戻るという点、また、中国人女性は結婚ビザが下りたら日本に渡り、日本人男性と一緒に暮らし始めるという2つの点で共通している。以上のような結婚の流れを見ればわかるように、どのタイプでもほとんど双方一度会うだけで結婚が決まるのである。しかも、このように初めて対面した時ですら、互いに言葉が通じない場合がほとんどである。また、男性は30代後半から50代の方が比較的多く、相手の女性はほとんど20代前半から30代前半の人たちであり、年齢差が小さくない。

次に本稿が、この業者婚に注目する理由を説明しよう。まず挙げられるのは、1980年代の農村花嫁問題から、2006年滋賀県の幼稚園児殺害事件⁽⁴⁾や2010年の日本男性被害⁽⁵⁾などで新聞を賑わせるのはこのタイプの結婚が多いということである。また、日本語もできず、1回会っただけの男性と結婚して日本で暮らしている女性たちは日本でいかなる状態におかれているのか、あるいは、こうした女性たちが日本社会や地域社会にどのような影響を及ぼしているのか、という関心の高まりがあげられる。さらに、このような国際結婚は日本だけではなく、台湾や韓国でも急増しており、研究が盛んになり、政府も対策を講じ始めている。しかし他方で、日本ではこの問題に対する学術研究は大変不十分であるのが現状だといわざるを得ない。筆者はこの業者婚の問題を重要視し、調査・研究を進めてきた。業者婚については実にさまざまなアプローチが考えられるが、本稿では日本で生活する彼女たちを理解する上で重要だと考えられる、日本に来るまでの結婚動機という観点から論じてみたい。

⁽⁴⁾ 2006年2月17日、中国人妻が子どもの同級生二人を刺し殺した事件。

⁽⁵⁾ 毎日新聞2010年5月27日記事『国際結婚トラブル：県内など願望強い農村部男性が被害 来月2日相談会』

2 先行研究

中国の女性たちは、いかなる動機や社会的背景のもとで日本にやってくるのでしょうか。この問いかけは、業者婚の問題を理解する上で基本的かつ重要な問題だと思われる。これまでこの問題は、多くの場合、日本と中国における経済格差という視点から論じられてきた。

たとえば、日本の東北農村の「外国人花嫁」に関する研究では、格差ゆえの「よりよい暮らし」への願望（宿谷 1988）、「アジア諸国の女性にとって、日本との経済力との格差が結婚の動機である」（佐藤 1989）とか、あるいは生活水準の向上や経済的格差（中澤 1996）によるものだと論じられてきた。そして、中国人妻に関しては、経済格差が根本的原因による金銭崇拜（葛 1999）があるとされ、雑誌記事などにおいても「経済格差の存在や日本の暮らしやすさ」（加藤 2004）こそが中国人女性の結婚動機だと論じられてきた。しかし、これらの結婚動機に関する論評は実証的な研究が根拠にあるわけではなく、なかば自明なものとして挙げられているものである。

その一方で、近年の研究の中では経済的要因とともに、結婚あるいは家父長制的諸制度などの社会文化的な要因（伊藤 2002）や出身国における離婚や失恋、失職など人生の不遇を経験した後に結婚移民を選択したという見解も出てきた（Nakamatsu 2003）。そして、最近の研究では、中国農村部出身の女性3名の事例を通して、結婚動機として、経済要因、ジェンダー的要因、文化的要因が見られると指摘されている（賽漢卓娜 2007）。具体的には、経済要因として、日本と中国の国レベルの経済格差だけでなく、女性の出身国国内の経済格差や出身地域と日本の受け入れ社会との間の格差の存在に注目することが重要だと述べられている。またジェンダー的要因としては、中国的家父長制的ジェンダー要因⁽⁶⁾と新国際分業におけるネオ家父長制的ジェンダー要因⁽⁷⁾があると分析している。最後に、文化的要因として中国の「面子」文化が背景にあると指摘されている。その上で、日本に行った中国農村出身の女性たちは多重な要因によって周辺化されている存在であり、与えられた「国際結婚」しかないという状況において、海外へ結婚移民する道を「最善」として選

(6) 賽漢卓娜の論文でこの要因の具体的な内容は「男尊女卑」、「女子なら容姿が重要な価値を有する」という認識、「女性は結婚によって、家族に貢献する者と期待され、家族は交換の『成果』を享受する」、「農村共同体における女性の『適齢期』という文化的規定」ということを指している。

(7) 賽漢卓娜の論文でこの要因の具体的な内容は「農村出身の若年女性はグローバル経済の『雇用の調節弁』になっていること」、及び「この雇用により伝統的労働構造が解体するのみならず、女生たちと出身共同体との間に『文化的隔たり』、出嫁ぎ女工の配偶者選択の困難を」生じさせること、「グローバル化はモノ、カネ、ヒト、情報の移動を促進することによって、ジェンダーの不平等を国を超えて再生産している」ことを指している。

択したと結論づけている（賽漢卓娜 2007）。

これらの研究は女性の出身国の経験や事情を重視し、結婚要因を多面的に分析している点においては画期的な意義がある。しかし、女性たちの語りに焦点をあてる一方で、女性たちはどの地域から来るのかといったマクロ的な問いが欠けている。これではグローバルな結婚行動が生じる要因を総合的に分析した研究とは言えないだろう。そこで本稿は、まず3節でマクロ的に女性の送り出し地域を調べ、その地域特性を分析する。次に4節でミクロ的に個々人の人生経歴から生まれる結婚要因を紹介する。さらに、その相互作用に注目する。最後に5節でこれらの知見を踏まえながら、結論を述べる。

3 マクロ的に見る女性の送り出し地域と地域特性

3-1 日本人男性と業者婚する中国女性の送り出し地域

斡旋業者による結婚で日本に来ている中国人女性は中国のどのような地域からやってくる人が多いのだろうか。どのような地域の出身者が、いかなる条件のもとで、移動しているのだろうか。彼女たちは中国の「貧困地域」から来ているのだろうか。管見の限り、こうした問いに注目した研究は存在していない。

斡旋業者による結婚の統計がないため、筆者はインターネットでの検索情報を手がかりに調査をおこなった。ある国際結婚紹介所のホームページに日中国際結婚の仲介を行う業者の情報を集めた表が載っている⁽⁸⁾。作成者によると、この表は各地域の大きく有名な、かつホームページを持つ仲介業者を中心に作成し、リンク切れや廃業がないかという調査も定期的に行い、更新しているという。この表には「女性地域」という項目があり、結婚紹介所はどの地域の女性を紹介しているかが掲載されている。大手業者が仲介を行う地域の情報なので、これで主な女性の出身地域が一瞥できると思われる。筆者はその「女性地域」の部分を下記図1にまとめた。

図1の横軸は女性の出身地域である。業者が使用した表記のままなので、行政区分が統一されていない。縦軸はその地域出身の女性を紹介する結婚紹介所の数を示している。このグラフから見ればわかるように、結婚紹介所は主に黒龍江省のハルビンと遼寧省の瀋陽・丹東・大連という地域の女性を紹介しているのである。特に黒龍江省のハルビンには圧倒的に多い。ほかには上海、桂林、北京もある。

⁽⁸⁾ <http://www.kalin-enet.com/gyouisyaitiran.html> 2010年8月28日にアクセス

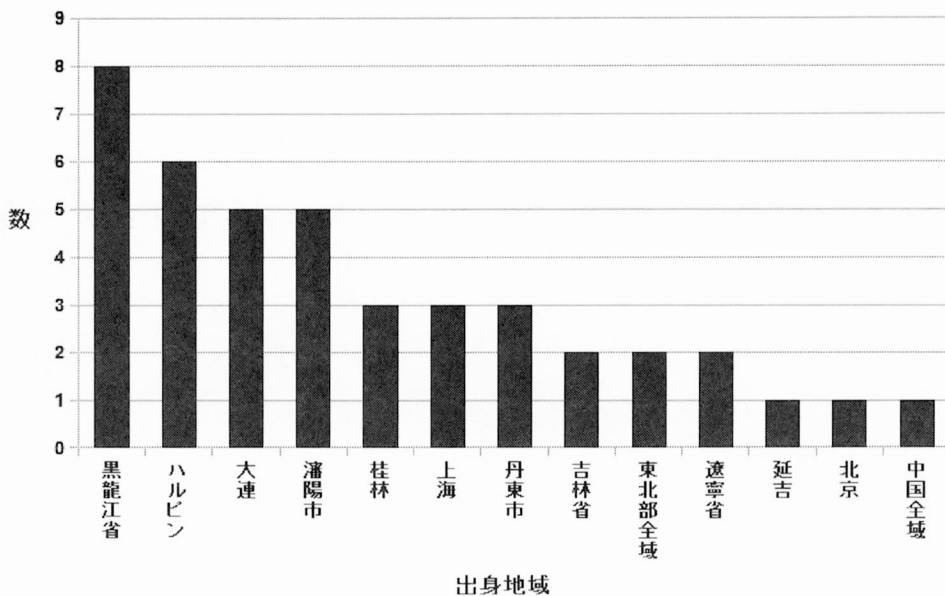


図1 日本男性と業者婚する中国女性の出身地域

(<http://www.kalin-enet.com/gyousyaitiran.html> に掲載の国際結婚紹介所の統計より筆者作成)

では、なぜ日本人と業者婚する中国女性はこれらの地域に集中しているのか。

時間と経費の制限で、すべての地域に調査を行うことができないので、一番多く女性を送り出している黒龍江省ハルビンと経済的に進んでいる大連と南部の桂林を選んで、資料を集め、実際に行って、観察及び調査をすることにした。

筆者は2009年8月から9月にかけてこれらの地域で、お見合い様子と現地の状況の観察および中国女性8人、業者7人に半構造化インタビュー調査を実施した。文献資料と調査内容の知見を通して、それぞれの地域を見てみることにしたい。

3-2 日本人と業者婚する中国女性の送り出し地域の地域特性

ハルビン、大連、桂林という3つの地域で行った調査を通して、これらの地域においては共通的な地域特性があることがわかった。その地域特性というのは日本と深い関わりを持っていることなのである。以下で詳しく見てみよう。

(1) ハルビン市方正県

まず黒龍江省の場合、省都ハルビン市出身の女性が最も多いことが図1から分かる。さ

らに調査結果からより詳しく言うと、ハルビン市の中の方正県⁽⁹⁾出身の女性が最も多いことが明らかになった。では、どうして方正県に集中しているのだろうか。

その要因の1つとして、方正県と日本との深い歴史的なつながりを挙げることができる。方正県政府のホームページ⁽¹⁰⁾によると、「日中戦時中に黒龍江省に送られた日本の開拓民たちが、日本敗戦後方正県を経由してハルビンからの帰国を望んだところ、方正県に着いたときに、寒さと伝染病で結局4,500人もの婦人や子どもが方正県に留まることになってしまった」そうだ。今日のいわゆる「残留婦人」、「残留孤児」のことである。

日中国交正常化の後、「残留婦人」、「残留孤児」たちは日本の肉親を探し、家族を連れて日本に帰国するようになった。その時に、中国で生まれ育った「残留孤児」2世の男性たちは日本で結婚相手を探すのが難しく、生まれ育った故郷に帰って探していた。また、中国の親戚や近所の人を日本人男性に紹介する人も現れてきた。そうすると、方正県から日本に行く人がますます増えていった⁽¹¹⁾。

実際に方正県においては、日本に親戚がいる人が多く住んでおり、国際結婚紹介業者、日本語学校と航空チケットの販売店などが多い。また各銀行には日本円の両替レートが書かれている掲示物があり、日僑が住むマイホームの建設が進んでいる。このような風景は極めて珍しく、ほかの地域に比して日本とのつながりの強さを表している。また、この地域では、人々は日本に対して大きな関心をもっており、筆者が宿泊していたホテルで開催されていた結婚式では、司会者が「日本多么神秘，日本多么美丽」（日本はいかに神秘で、いかにきれい）と言ってから、新婚の夫婦は結婚後まもなく日本に行くことを発表し、彼らは「去日本，去拼搏，去为了自己的梦想而奋斗」（日本に行って、一生懸命に自分たちの夢のためにがんばっていく）と話していた。この小さな県では日本のことが日々の話題となっているのである。

(2) 大連市

次に大連を見てみよう。大連は19世紀の中頃以降、列強の中国侵略の一環として開かれていて、ロシアや日本などに占領された歴史を持つ（関 2000: 41）。現在は中国東北地方の代表的な工業基地の一つであり、1984年5月に中国沿海の14の港湾都市の一つとして対外開放された。大連は、遼寧省・吉林省・黒龍江省という中国東北の各省にとっての玄関口である。開放以来、大連を「北の香港」にするという中央の意向も打ち出されてい

⁽⁹⁾ この「県」は中国の行政区分単位で日本の「郡」に当たる。

⁽¹⁰⁾ <http://221.212.34.171/mlqx/qxyl/201007142016.htm> 2010年8月29日にアクセス

⁽¹¹⁾ 方正県の人たちの話による。

た（関 2000: 12）。そのような背景から、大連は積極的に外資を受け入れ、発展してきたのである。

一方、日本企業にとって、大連は、海洋性気候で過ごしやすく、海産物も豊富で、戦前の影響から年配者の間では比較的日本語が通じることなどもあり、当初から注目されていた（関 2000: 12）。事実、大連における日本の存在感は大きい。1984 年から日本企業は大連に進出するようになり、1997 年末に大連の外資系の企業の中で、従業員数、生産額のいずれをみても、日本企業がほぼ半数を占めている（関 2000: 132）。日本企業の大連への直接投資は上海に及ばないが、都市規模を差し引けば、大連における日本企業の存在感は圧倒的に大きい。上海において日本企業は、香港、台湾、欧米諸国などの企業が集積している中のひとつの部分でしかないが、大連においては日本企業によって外国企業のイメージが形成されている（関 2000: 2）。日系企業とともに大連が発展してきたと言えるほど、日本企業と大連の関係は密接である。

また、大連外国語学院という大連にある大学は 1964 年に設立され、当時の名前は大連日語専科学校（大連日本語専門学校の意）だった。そして、2010 年現在の大連外国語学院の日本語学院には 3,300 名の学部生が所属しており、世界でも最大の日本語教育機関である⁽¹²⁾。更に、それとは別に大連には日本に研修生を送り出す機関も存在し、大連市近郊農村部の若い人たちを日本に送り出しているのである。このように大連は様々な場面において日本と密接にかかわっている都市なのである。

(3) 桂林市

最後に桂林について説明する。中国では「桂林山水甲天下」という言葉があり、桂林の山水景色は天下で一番という意味である。中国で最も早く観光産業を発展させた地域で、1973 年に対外開放された。毎年、多くの人が訪れており、特に外国からの観光客が多いことが桂林の特徴である。1997 年に桂林市の国際観光客から得た収入と、第三次産業収入の比率は全国第 1 位である（邢・李・趙 2005: 713）。近年はその他の新興都市も観光地としての地位が高まってきたが、桂林は依然として中国全国のなかでも上位を占めている。また国際観光客の中には特に日本と台湾の旅行者の比率が高い。日本に関しては、1980 年代から（2002 年を除き）ずっと桂林市随一の「客源」⁽¹³⁾（呉 2008）になっている。多くの日本人はその景色に惹かれて訪ねてくるのである。近年、定年後桂林に移住する日本人も現

⁽¹²⁾ <http://jp.dluf.edu.cn/xygk/> 2010 年 8 月 30 日にアクセス

⁽¹³⁾ 客源：「観光客の源」の意味で、得意先をさす。

れるようになった。

筆者が桂林市でインタビューした日本男性は15年前に初めて桂林に来て、その景色に感動し、それから40回ぐらい桂林に来ているという。またそのうちに、物価が安い、人間が暖かいということがわかり、2004年から桂林に移住してきたのである。住んでから日本語教室を開いて日本語を教えるようになって、生徒たちに日本男性との結婚を斡旋するようになった。

また、台湾や香港の会社も桂林に進出して、それにより台湾人や香港人との結婚も少なくない。そのようなケースが、桂林市の国際結婚の70%を占めており、その次がアメリカと日本で20%を占めている（張1994: 93）のである。

こうして実際に調べてみると、桂林も開放的な地域で日本とつながっているのである。

3-3 考察：社会関係資本の重要性

以上、日本人男性と業者婚をする中国女性の送り出し地域と筆者の調査による3つの地域の特性を見てきた。大手業者が仲介する地域の統計からみれば、女性は中国各地域から来るのではなく、いくつかのエリアに集中していることがわかった。また、実際にハルビン、大連、桂林という地域を見てみると、日本と関連が強いこと、つまり両国における社会関係資本が蓄積されていることが共通の特徴であることが明らかになった。

まず、方正県には残留婦人と残留孤児の数が最も多く、日本に関する情報が豊富で、規模に比して社会関係資本が多く蓄積されている。ハルビン市にはいくつかの県があるが、国際結婚業者が集中しているのは方正県だけである。その理由はいくつか考えられる。まず、日本を訪れたことのある人たちが帰ってきた時に、「日本の環境がよい」、「現地と比べて給料が高い」、「日本は住みやすい」などの情報を人々に伝えることで、まわりの人々の日本に対する憧れを煽るのである。と同時に、そのような人たちの変わり様や現地の不動産投資などを見ると、人々に相対剥奪感が生じ、日本への憧れが強くなる。また、日本に親戚や知り合いが多くいることは、人々にとって日本に行くことに対する恐れを緩和する効果をもつ。さらに、日本に行くことを希望する人が増えていくにつれて、現存の人間関係、社会関係資本が商品化され、仲介することがビジネスになり、市場を通じて人々を外国に送り出すルートが強化されるのである。以上のような理由で社会関係資本が蓄積されればされるほど、日本に行く人が増えていくと考えられる。また、大連は日本企業の進出や日本に労働力を送り出すことが日本との社会関係資本の蓄積を促進していると考えられる。桂林はその気候と自然景色で日本人観光客を集め、日本からの移住者を招くことにより、日本との社会関係資本が蓄積される。

上記の地域のように資源や環境がないところでは、人々の渡日の希望も薄く市場も存在しないのである。筆者はある仲介業者から、他の地域、例えばもっと貧しい地域などの女性にこの国際結婚の話を持ちかけても、誰も応じてくれないという話を聞いた。またある業者はこの結婚の話が違うところに持ち込んだら、「人を売買するつもりか」と言われて追い出された経験があるという。ほかに筆者が調査できなかった中国女性の送り出し地域でも何らかの理由で日本との社会関係資本を持っていると推定できよう。

では、これらの地域で日本人と結婚した女性や、結婚を希望する女性にはどのような個別の事情があるのだろうか。その点に関しては次節で検討する。

4 ミクロ的に見る女性たちの人生経歴から生まれる結婚要因

本節では上記で見てきた3つの地域で行った女性のインタビューをそれぞれ一人ずつ紹介したい。それを通してよりミクロな観点から、個々人のライフストーリーに注目し、彼女たちが日本に来る理由を検討する。

4-1 Aさん——ハルピン市

Aさん（インタビュー時、23歳初婚／夫 38歳初婚）は方正県の農家で生まれ、兄が一人おり、4人家族である。彼女は中学校を卒業後、地元を離れ、親戚のいる都市で働いていた。その仕事は毎日ノルマが設定され、それを達成するためによく働き、毎日が充実していた。彼氏もできて、とても幸せだった。しかし22歳の時にその彼氏と別れてしまった。失意の中、Aさんは故郷方正県に帰った。農村では結婚が早いので、家族にその話を持ちかけられた。親にまわりのような日本人との結婚は考えないかとも言われた。彼女は自分自身の結婚のことを考えるようになった。

これからどうするかとAさんは考え込んだ。同級生で仲のよい友達の2、3人は日本人や韓国人と結婚している。親戚のおばさんや近所の人も日本人と結婚している。いろいろ話をよく聞いているが、うまく行く人もいれば、すぐ帰ってきた人もいる。自分もいつも日本がきれいで、日本人は礼儀正しい、日本ではお金を儲けやすい、といった噂話を聞き、興味がないわけではなかった。無論、向こうでいじめられた、あるいは、夫が変な人だったという話も聞いたことがある。

いま彼氏と別れてしまい、もう結婚する歳⁽¹⁴⁾になったので、彼女はどうなるか分から

⁽¹⁴⁾ 2007年中国農村男性平均初婚年齢は25.49歳で、女性は23.13歳である（2007年中国人口年鑑より）

ないなと思いつつ、運がよければ、良い人と出会えて、安定的な生活が送れるかもしれないという理由から、国際結婚業者のところにも一応登録しておいた。その後、日本人男性がお見合いに来たと業者から電話での連絡が来て、彼女はお見合いに行ってみた。実際に行ってみると、日本人男性は一人だが、お見合い相手の女性は何人もいた。それぞれ次々と部屋に入って、その男性と通訳を通して話をした。お見合いした相手の日本人は面白そうな人だと思ったが、結局彼はほかの人とつき合うことになった。その後、1年半ぐらい家にいながら何回もお見合いをして、いまの日本人夫と結婚した。

方正県という日本に行く人が多いこの町では、彼ら/彼女らには、日常的に日本から帰ってきた人たちなどから情報が入ってくる。このような環境の中、彼氏と別れてしまい、農村の結婚適齢期になったAさんは、やはり周りの友達や親戚、近所の人と同じように日本人との結婚も選択肢に入れたのである。

4-2 Bさん——大連市

Bさん（インタビュー時、28歳未婚）は、大連市郊外の農村地域で生まれた。妹が一人の4人家族であった。中学校卒業後、大連の開発区付近でアルバイトしていた。それから研修生⁽¹⁵⁾募集に応募して、日本で3年間働いた。日本にいる間は、仕事が大変で日本人と比べたら、給料もとても少ないが、幸い出会った人々はみな親切だった。日本の環境も好きになった。日本から帰ってきた後、もう農村にいることはできずに、大連市内でがんばって生きようと決めた。また、いままで考えたことがない英語やダンスやピアノなどの習い事や、旅行への関心が大きくなっていった。しかし、それらをする余裕がまだないので、とりあえず日本語学校に入って、続けて日本語を勉強し、日系企業で働くようになった。妹も日本で研修していて、日本語能力試験2級に合格した。妹に対しては、こちらから本を買って送って、1級にも合格できるようにサポートしている。妹は頭がよいため、日本で留学ができればいいとBさんは思っている。

日本が好きになって、また日本に行きたいと思うBさんは日本人との結婚も考えた。普段出会う機会があまりないので、Bさんは業者のところにも登録した。何回もお見合いに呼ばれたが、相手に離婚歴があったり、歳が離れすぎていたりしてうまく行かなかった。自分はどうしても本当に好きな相手でないとは結婚して日本に行くことはできないとBさんは言った。

り引用)

⁽¹⁵⁾ 日本の「外国人研修・技能実習制度」にもとづき、日本に働きに行く身分。2010年7月にこの制度が改正された。

Bさんの場合は、日系企業が多く、日本語の教育機関が充実しており、市郊外や農村の若者の日本への研修ルートもできている大連市にいますので、研修生として日本で働くということを比較的容易に選択することができた。また、Bさんは、研修生として日本で3年間働いたことにより、日本のことを噂で聞くだけではなく、自ら経験することができた。そして、日本で出会った親切な人々、日本の良い環境に惹かれることになった。日本から帰ってきた彼女は、もう農村にすることができなくなった。そして、市の中心部で日本語を勉強し、日本企業で働くようになった。おそらく彼女は日本でいままでと違う生活様式を見たのではなかろうか。日本での生活がより文化的に豊かな生活が見えたのかもしれない。そのような生活に憧れ、日本の環境も好きで、また行きたいと考えているが、中卒の彼女は留学ができない⁽¹⁶⁾。研修生としても1度行ったら、3年以内に再び日本に行くことができない。2度行くことのできる人は本当に稀である。つまり結婚以外、日本に行く道がないと言えよう。しかし、Bさんは結婚を日本に行くための単なる手段としたくないと考えている。できればお互いのことを好きな日本男性と出会って、恋愛して結婚したいという。Bさんが同じ研修生の友達で日本人と恋愛結婚した友達のことをうらやましように語った。だが、大連には日本人が少なくないが、彼女はそれほど日本人の男性と接触できないのである。最終的には業者のところに行ったが、もともとお見合いに来る日本人男性はそれほど多くなく、実際にお見合いできる人はもっと少ない。理想的な人と出会えていない彼女はまだ出会いを待っているのである。

4-3 Cさん——桂林市

Cさん（インタビュー時、34歳再婚／夫 46歳初婚）は桂林市に生まれ、中学校を卒業してからいろいろな仕事をしてきた。桂林よりも南部に位置する大都市4年間ほど働いたこともある。Cさんには、8歳の娘が一人いる。中国人の夫と結婚後、しばらく育児に追われて、仕事をしなかった。夫は当時商売をしており、十分な収入があった。しかしその後、夫は稼いだお金で賭け事をするようになり、浮気もするようになった。Cさんはそのことが原因で離婚した。夫はすっかりお金を使い切っており、娘の教育なども夫の両親がサポートしている。

桂林市は外国人が多く訪ねてくるため、台湾や香港、またその他の外国人との結婚がそれほど珍しいことではない。Cさんはずいぶん前から外国のことや、外国人との結婚のこ

⁽¹⁶⁾ 日本の規定によれば、留学するには中国で12年以上の正規学校教育を受けていることが条件である。つまり、高卒以上でなければならない。

とをたくさん聞いていたけれど、全く関心がなかった。しかし離婚後、学歴もなく、仕事もないという状況において、自分はともかくとしても、まだ8歳の子どもの教育や将来のことについて心配するようになった。離婚した自分は地元で再婚するのは簡単なことではないとCさんは考えている。いまから仕事をして非正規雇用で給料も安く、子どもによい教育をさせることができない。この時、Cさんは外国人との結婚を考えるようになったという。よい人と出会ったら、一緒に残った人生を幸せに暮らしたい。たとえよい人に出会えなくても、日本で仕事をし、自分の手で自分と娘の将来のために働くことをCさんは決めたのである。なぜなら同じような仕事をして中国よりも日本など外国の給料のほうが高いからである。自分で日本のことを確かめた上で、もし環境もよく、教育もよいなら、娘を連れて行くことも選択肢としてあった。その後、Cさんは業者のところに登録し、日本語を勉強しながら、お見合いを待っていた。その結果、いまの夫と結婚したのである。

筆者の仲介業者に対するインタビューによると、このような業者婚をする女性は、離婚歴のある女性が多いという。先述のとおり、Cさんには離婚の経験がある。傷つけられて離婚した女性は、もとの場所を離れたいとか、もっと強くなって、自立しないといけな思考え、業者婚を決断する。Cさんが自分と娘の将来のために外国に行くことを選んだことは、その例である。周囲に結婚斡旋業者が存在しており、日本へのアクセスが比較的容易であるということが前提条件になっている。これらの条件のもとで、いまの夫と出会って、Cさんは日本に行くことになったのである。

4-4 考察1：経済的要因、親密関係的要因、主体的要因という結婚要因

本節はインタビュー内容を通して、3節で紹介した三つの地域において、女性たちが日本に行く理由を見てきた。その結果、女性の人生経験から生まれる結婚動機には経済的要因、親密関係的要因、主体的要因がみられることが明らかになった。

まず、経済的要因として、Aさんの場合は、日本でもっと安定的な生活ができること、Bさんの場合は日本でより豊かな文化的生活を享受できること、Cさんの場合は日本で高い給料をもらい、子どもによい教育をさせること、というそれぞれの具体的な希望を持っている。また親密関係的要因として、彼氏と別れたこと、結婚適齢期になって結婚とこれからの人生を意識するようになったこと、離婚したことが含まれる。これらの要因はいままでの研究でも見られ(Nakamatsu 2003)、筆者も以前論文で具体的な例を紹介した(郝2010)。更に、主体的要因としては、特にBさんの行動にあるように、実際に日本に行って、いろいろなことを見聞し、憧れが生じ、再び日本を訪れたいと考えるようになることを挙げることができる。しかし、制度上では簡単に日本に行くことができない。そのよう

な状況の中で、すなわち現実的な制度の束縛の中から、彼女たちは国際結婚を選択しようとするのである。いままでの先行研究ではこのような事例が研究であまり見られていない。賽漢卓娜の論文でも研修生の事例に触れているが（賽漢卓娜 2007）、一家の大黒柱として日本に研修に行くのも、国際結婚するのも実家の家計を支えるためだと述べられている。筆者がインタビューした B さんの事例はそれとかなり違った。B さんの事例は妹を日本で留学させたいと考え、自分もより豊かで文化的な生活に憧れて、普段から日本語を勉強し、日系企業で働きながら、再び日本に行く機会を待っているのである。簡単に外国に行けない中国で、B さんは主体的に国際結婚を考えようとしたのである。

考察 2：社会関係資本と女性個人動機の相互作用

ここで注目する必要があるのは、社会関係資本と女性個人動機の相互作用である。

本稿でとりあげた地域は歴史的、経済的などの要因で日本とつながりを持ち、社会関係資本が蓄積されている。この社会関係資本は、自由に外国にいけない中国では外国への渡航を可能にする重要なポイントになっている。この社会関係資本の存在により、外国の情報が入るようになり、外国に行く手段が提供されるのである。仲介業者による結婚紹介もまさにこの社会関係資本の産物である。このような社会関係資本のない地域では、外国との間には実質的な交流がほとんどなく、外国の情報も少ない。業者婚も存在していないのである。

しかし、このような地域においても、どの女性も外国人との結婚を望んでいるわけではない。本稿のインタビューからわかるように、経済的要因、親密的な要因、主体的な要因が存在している。

つまり、社会関係資本と女性個人動機の相互作用で業者婚が成立していると言える。個々人の結婚動機要因が社会関係資本と結びついてはじめて国際結婚という選択肢が生まれてくるのである。無論、日本男性側の事情もあるのだが、それを別稿にて論じる。また、いま社会関係資本がインターネットを通じて作り出され、広がっていく現象が起きつつある。

5 おわりに

本稿は、業者婚をした、あるいは業者婚を希望する中国女性たちの結婚動機を考察してきた。

いままでの研究では女性の結婚動機に関しては日本と中国の経済格差が主に強調されて

きた。確かに経済格差は大切な要因である。しかし、その前に歴史や経済的な理由で中国の特定の地域は日本とつながりがあって、両国における社会関係資本が蓄積されていることも見逃してはならない。アメリカの学者 Saskia Sassen が論証しているように、「移住自体は高度に選択されたプロセスである。特定の人しか移動できない、しかも彼らの向かう目的地へのルートは高度に構造化されており、盲目的にどれでもよい豊かな国にどんどん入っていくのではない。移動がこのような高度に構造化された形をもつのは、送り出し国と受入国との間の相互作用と相互関係という理由である」(Sassen 2000: 2 筆者訳)。本稿の女性の送り出し地域に関する分析を通してみれば、中国女性の日本への移動も両国の相互作用によるものだとわかる。

本稿の議論からわかるように、特定の地域から中国女性が日本に移動することは、日本が中国東北部を植民地にしていたこと、日本企業が中国に進出していること、中国からの研修生という労働力を受け入れていること、日本人が中国に移住してきたこと(AさんとCさんが登録する業者はみな中国に長期居住している日本人)と関わっているのである。一方で、中国側の改革開放政策がないと、女性も出国できない。まさに送り出し国と受入国との間の相互作用と相互関係が社会関係資本になり、構造的に移民のルートを作ったのである。

一方、このような日本と関係を持つ地域において、どの女性でも日本人との結婚を希望するわけではない。日本人との結婚を希望する女性には人生経験から生まれる結婚要因も存在する。本稿では三人の事例を通して、彼女たちの結婚要因を三つに分類した。その中の経済的要因と親密関係的要因は先行研究でも見られたが、主体的要因は本稿で新たに提示した点である。

更に、本稿ではいままで注目してこなかった社会的関係資本と女性個人動機の相互作用に注目した。それぞれ結婚要因を持つ個人がほかの地域にいれば国際結婚という選択をとらない。個人動機と社会関係資本との相互作用がなければこのような国際結婚は生まれないう点をあらためて強調しておきたい。

無論、本稿が業者婚する中国女性の結婚動機を全面的に論じたわけではない。ほかの地域や事例には違う状況もあるだろう。今後も事例を増やして研究を深めていきたいと思う。また、日本男性側の要因や、日本や中国だけではなく、業者婚が存在する他の国との比較も課題である。

付記

本稿は科学研究補助金・基盤研究B「アジアの女性の国際移動：家事・介護労働と国際結婚において」による成果のひとつである（課題番号 19402011 代表者：上野加代子）。

また、インタビューを受けてくださった方々、査読してくださった方々に深くお礼を申し上げたい。

参考文献

- 葛慧芬, 1999, 「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの重要性——中国人花嫁の事例から」『日中社会学会研究』7: 日中社会学会.
- 郝洪芳, 2010, 「業者婚をした中国女性の主体性と葛藤」落合恵美子編『いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成』, 国際日本文化研究センター, 181-195.
- 伊藤るり, 2002, 「国際移動とジェンダーの再編」原ひろ子編『比較文化研究——ジェンダーの視点から』, 放送大学教育振興会, 229-52.
- 加藤薫, 2004, 「中国人花嫁、急増の謎と男たちの本音」『婦人公論』89 (14) : 132-5.
- 李旭・马耀峰, 2003, 「海外旅游者对旅游目的地和旅游路线的选择研究」『陕西师范大学学报（自然科学版）』31: 115-9.
- Nakamatsu, Tomoko, 2003, "International Marriage Through Introduction Agencies: Social and Legal Realities of 'Asian' Wives of Japanese Men", In *Wife or Worker? Asian Women and Migration*, eds. Nicola Piper & Mina Roces, Rowman & Littlefield, ch. 4. : 181-201.
- 中澤進之右, 1996, 「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識——山形県最上地方の中国・台湾・韓国・フィリピン出身者を対象にして」『家族社会学研究』8: 81-96.
- 賽漢卓娜, 2007, 「中国人女性の「周辺化」と結婚移住——送り出し側のプッシュ要因分析を通して」『家族社会学研究』19 (2) : 71-83.
- Sassen, Saskia, 2000, *Guests and Aliens*, New York, New Press.
- 佐藤隆夫, 1989, 「農村（むら）と国際結婚」日本評論社.
- 関満博, 2000, 「日本企業／中国進出の新時代——大連の10年の経験と将来」新評論.
- 宿谷京子, 1988, 「アジアから来た花嫁—迎える側の論理」明石書店.
- 吴洁, 2008, 「桂林市日本客源市场开发研究」, 桂林工学院, 硕士论文.
- 邢珏珏・李业锦・赵明, 2005, 「我国城市国际旅游竞争优势特征及其影响因素分析」『经济地理』25: 712-715.
- 张国钦, 1994, 「桂林市涉外婚姻的现状、问题及对策」『社会科学家』4: 93-6.

(かく こうほう・修士課程)

A research on international marriages among Japanese and Chinese: Focusing on Chinese women's motivation for marriage

Hongfang HAO

In my paper, I discuss Chinese women's motivation for marriage to Japanese men through intermediary agencies. Previous studies have focused on economic disparities, as well as, social and cultural factors. However, there has been no research study paying attention to the question - from a macroscopic perspective - of where these women actually come from. Having this problem in mind, I first searched for regions on a macro-level where Chinese women married to Japanese men come from. It became clear that such women do not come from all over China, but just from certain areas. In quest of the characteristics of these areas, it also became clear that these areas hold certain social capitals with Japan that provide the route to Japan for these women. Moreover, based on such women's life experiences, I also analyzed their motivation to come to Japan on a microscopic level. As a result, economic factors, intimate relation factors, agency factors have been found significant. Furthermore, I also focus on the interaction between the macro and micro levels. Not all of the women living in areas that have social capitals with Japan intend to marry Japanese men. Women that have intimate relations with other areas cannot imagine marrying Japanese men. Thus, in this paper I argue that the research of the interaction between regionality on the macro-level (that is, the social capitals of a given region with Japan) and individual factors on the micro-level become indispensable to understand the true characters of international marriage.